政策提案特別委員会記録

令和６年５月１０日

【開催日】　令和６年５月１０日（金）

【開催場所】　第２委員会室

【開会・散会時間】　午後１時３２分～午後２時３９分

【出席委員】

委員長	大　井　淳一朗	副委員長	中　岡　英　二
委員	伊　場　　勇	委員	笹　木　慶　之
委員	山　田　伸　幸	委員	吉　永　美　子

【欠席委員】

なし

【委員外出席議員等】

副議長	中　村　博　行		

【執行部出席者】

なし

【事務局出席者】

局長	石　田　　隆	局次長	中　村　潤之介

【審査内容】

１　次世代育成について

２　その他

午後１時３２分　開会

大井淳一朗委員長　皆さんお疲れさまです。ただいまより、政策提案特別委員会を開会します。お手元にあります付議事項に従って進めてまいりますので、委員会運営に御協力のほどお願いします。付議事項１点目、次世代育成についてです。私たち政策提言の一つのテーマとして、この次世代育成を挙げておるわけですが、守備範囲が少し広いので、本市の現状を聞く前に、まずは私たちで一度、論点を整理したいと思っております。どういうことかと申しますと、次世代育成と一言で申し上げましても、次世代を育む環境の過程づくりというアプローチを取るのか、あくまで

も子供たちを中心にその子供たち自体を育成していくのかというアプローチの違いもありますし、また、学校教育の場面なのか社会教育の場面なのか、あるいはシビックプライドの醸成のような市への郷土愛の育成なのかといったことがありますので、その辺りをもう少し絞り込んでから本市の現状を聞きたいと思います。あくまでも、このまちに住みたい、住み続けたいというあるべき姿からアプローチして、今日の議論を深めていきたいと思いますので、よろしくお願いします。初めに、次世代育成という言葉自体は、次世代育成協議会というのが昔あったんですけれども、つい最近閉じて、子ども・子育て協議会の中に入って、計画もその中に入っております。これを重視するならば、あくまでも次世代を育成する環境づくりというよりは、どちらかというと子育て支援のほうになっていくので、そっちに近づけていくのか、あるいは、この前から話が出ているのは、その地域愛というか郷土愛といったものを育成するというところもあったので、そういったアプローチにするのか。まずは座標軸をどっちにするか決めて、そこから中に入っていきたいと思っております。皆さんいかがでしょうか。もちろん、この前言われたことにとらわれずに、あくまでも次世代育成というところから皆さんのお考えを聞きたいと思います。いかがでしょうか。何の打合せもなしでしたので、皆さんも急にはなかなか難しいでしょうけど。

山田伸幸委員　言われたように、次世代育成となると幅が非常に広くなってしまうんですけれど、前にも言いましたように山陽小野田市の課題は何なのか、これからの山陽小野田市をいかにしてつくっていくのかということになると、一番の課題となっている人口減少について、きちんと私たちなりに政策的な一つの成案を作成し、打開していく道筋をつけていかなくてはいけないのではないかなと思います。

大井淳一朗委員長　ありがとうございます。あくまでも、あるべき姿からアプローチしてください。それで、考えていただければと思います。あるべき姿が「このまちに住みたい、住み続けたい」です。結局、子供たちが

都会に出たまま帰ってこないという現状がありますよね。都会に出ること自体は別に否定することではないんですが、ある程度の段階でこちらに戻ってきたいと思うような感じにするためにはどうしたらいいかということですよね。

山田伸幸委員　そもそも、このまちから都会に出る必要がなければいいわけですよね。本市にはいろいろな産業もあるわけで、県内他市から言われたこともありますけど、山陽小野田市は非常にうらやましい環境があるんだと。多くの工場も立地しているし、新しい工業団地も着々と進出が進んでいるし、大学もあるし、病院も福祉施設もあると。そういった中で、私たちが取り残されている部分はどこなのかということをはっきりしていくことが必要ではないかなと思います。

大井淳一朗委員長　流出を避けるためにどうしたらいいかといったアプローチですね。ほかにも皆さんからの意見を聞きたいと思います。

伊場勇委員　次世代育成というと広いので、今の出ている議題から話をすると、都会に出るということは、都会のほうに魅力があって、選択肢が多いんじゃないのかなと思います。刺激があるもの等々がいろいろあるんです。戻ってこないということは、向こうに選択肢が多くて魅力があるから戻ってこないわけで、山陽小野田市内のいろいろな財産というか、企業とか病院とかもそうなんですけど、そこを充実させても、向こうのほうに魅力があれば向こうに行くし、帰って来ないということですよね。では、今から何をしなければいけないのかと考えるのであれば、生まれ育ったまち、誰に対してもふるさとというところがあると思います。ふるさとに対して、もし愛があるのであれば、そこに人生をかけて戻ってきて、そこで子供をつくろう、家庭をつくろう、幸せな生活、人生を送ろうというところがあると思うんですけど、この山陽小野田市がふるさとだって思うけど、人生をここでというところまで多分行き着いていないんだと思います。そこの幸せが、まだ都会にいたほうが、魅力があるからと

いうことだと思うんですよね。前回ぐらいに話したんですけど、山陽小野田市は田舎なので、あるものが都会と比べて少ないんです。もっとこのまちの歴史だったりとか、ほかにはないものだったりとかがいっぱいあると思うんですよ。例えば、前原一誠さんとか青木周蔵さんとか来島又兵衛さんとかのように、このまちをつくった人がいて、そういうところを子供たちとか学生とかに、自分事としてもっと落とし込むことができるのであれば、その人たちがまちをつくってくれた、今までつなげてきてくれた、私たちは今からどう生きるんだというところまで子供たちが考えてくれるのであれば、山陽小野田市に対してのふるさととか郷土愛とか、もし何かあったときは戻ってこようとか、何かそういうところまでの気運の醸成につながるんじゃないのかなと思います。これはすぐできるものじゃないので、積み重ねていかないといけないのかなと思います。郷土愛についてはそう思います。

山田伸幸委員　それについては、ここで生まれ育っていない人が一定年数ここにいて、そのまま残りたいなと思われるまちかどうかを見たときに、先日も話が出ておりますけど、大学生が卒業した後、このまちに残ろうとしていないという事実があったと思うんですよね。残るのは１０％程度でしたか。なぜ、そんなことになるのか。せっかく何年もここで勉強しても、就職か何かのために、魅力のあるまちというか自分にとっていいまちに行ってしまう。その点で、山陽小野田市の物足りなさというのは何なのかを知ることが必要になってきている。それが課題ではないかなと思うわけです。やっぱり、生まれ育てば、何かの拍子に帰ってくる可能性はあるんですよ。生まれや育ちが違うところで、学生時代だけをここで過ごしたとしても、まちの圧倒的な魅力がそういった皆さんの心に届けば、さっき言ったような１０％ということはなくて、もう少し違った数字が出てくるんじゃないかなと思います。

大井淳一朗委員長　多分、２０％弱という感じでしたね。１０％ではなかったと思います。ただ、山田委員の言われるように、山口東京理科大学には

学生が全国から集まってきて、恐らく自分たちの元のふるさとに帰っていく感じですよね。伊場委員が言われるのは生まれ育ったまちということで、山田委員が言われるのは第２のふるさとじゃないけど、４年間ないし６年間ほど学んだまちということですね。少なくとも県内にとどまってもらうために、どうしたらいいかということを考えないといけないですね。理想は市内ですけどね。

山田伸幸委員　ふるさとという言葉が出てきましたけれど、それがなくても、このまちに残って、このまちのために、自分の人生を使っていきたいと思えるかどうかですよね。このまちに来て、結婚して子供を産んで、そして家も持って、また次の世代に結びつけていくというようなまちづくりができていないことをもっと掘り下げていくことが必要ではないかなと感じています。

伊場勇委員　なので、まずはここで生まれた子供に対して何が一番必要なのかというところですよね。それがどう将来子供たちのためになるかということが１点です。それと、さっき山田委員が言った「よそから来た、そして学生時代や若い頃に過ごす人」に対してどういうことが必要なのか。これは二つ別々だと思うんですよ。次世代育成も市内をユニットで考えるのか、県なのか国なのかで、大分違うんですけども、市議会なので、市のことを考えるんであれば、二つはそれぞれ違う考え方で話さないといけない。例えば、山口東京理科大学の学生に話を聞いて、こちらとしては第２のふるさとと思ってほしいわけじゃないですか。絶対ここにおるよというわけではなくて、いろいろあっても第２のふるさととして、地域のいろいろな状況もしっかり理解していただいた中で、その後の人生のふるさととしての位置づけをやってもらいたいってことですよね。それが育成にどうつながるかということは、それなりのインパクトがないといけないんですよね。初めに話をした、生まれ育った人もそうですし、よそから来た人もそうです。ということは、何かしらの政策でやるのも一つあるし、人の関わりが大事なんじゃないのかなって思うんです

よ。親や兄弟以外に学校の先生以外にも自分のことを知ってくれていて、分かってくれていて、相談する間柄であれば、そう思ってくれると思う。それは山口東京理科大学の学生であっても、ここで生まれ育った人であっても一緒と思います。その辺の次世代育成について、市でできるのは小中学校ですよね。市の教育委員会ですよね。正直なところ、そこまでは皆さんも結構やっているんじゃないのかなと思っています。コミュニティ・スクールなどですよね。だけど、高校や大学まで行くと、もう散らばってしまいますし、そこでつながりが少し薄くなって、大学とか専門学校とか就職とかでさらに薄くなって、結局、僕の近所でもそうですけど、「あの人は、どこに行っとんじゃろうか」、「あそこの子は何しよんかな」みたいな話が結構あると思うんですよ。みんなが知っとくべきではないけど、コアなつながりを持てる仕組みが何かあるんであれば、心配もするし、向こうも気になるし、次世代の育成につながるような形が構築できるんじゃないかなと思います。とても難しい話をしているかもしれませんけど、そういった人のつながりが、まず一つです。それが施策で何かできるのであれば、すばらしいなと思います。どうしたらいいかとは言えませんけど。

吉永美子委員　次世代育成というのは本当に幅が広くて、なかなか「これだ」というのを出すのは難しいと思っています。以前、千葉市に視察に行きました。伊場委員が言われたように、小学校も中学校もある程度支援できているんじゃないかということなんですけども、結局、１８歳で高校を卒業してから、若者と言われる方々の支援という部分では薄いと思ったので、どういうシステムにしているかを千葉市に行って聞いてきたんです。置き去りにされていく若者がいない山陽小野田市をつくっていかないといけないのではないかと思っていたものですから、視察に行って、こういうところが関わってやっているところですというお話を聞かせていただきました。山陽小野田市は最初大きい網でいいけど、だんだんと小さい網じゃないと引っかからない人が出てしまってはいけないので、網が何重まできちんとされているかというところが大事です。高齢にな

っていけば地域包括支援センターが入ってくれることがあるけど、ちょうど中間の高校を経てから４０歳になるぐらいまでの方々に対しての支援は決して厚くないと思っていて、その点でシステムは大事ではないかなと思っています。

笹木慶之委員　私が思うのは、まずは自らがお互いを振り返ってみないと解決できないんじゃないかなと思うんですよ。例えば、私が今ここに住んでいるのはなぜなのか。私が、子供が次を（聴取不能）ほしいことは何なのかというように、自分のこととして物事を考えないと、多動的では世の中は動かないと思う。多動的な要素は何かと言ったら、まずは土着性の問題です。土着性というのは、いわゆる財産に関係する問題であって子孫の問題が関係するんで、当然、農業とか商業とか漁業とかという定着性のある職業を継続的にできるんであれば、少なくともそこに住んでいくということが生まれてくると思うんですよ。ところが、そこで全部が変更されてくると、みんな放射上に離れてしまう。それで思いどおりやってしまうということですね。もう一つ考えてみたいことは、企業城下町という言葉を知っていると思いますが、例えば日本鋼管がどのように造られたか、日本化薬はどうつながったか、富士電機化学はどうなったか、宇部興産がどうなったか、小野田セメントはどうなったか。皆そうでしょう。いわゆる資本主義社会の中で自由闊達に社会を飛び回って、自由に社会をつくっていくことは良いことなんだけど、守る人がいなくなる。その最先端というか最後尾につながってきたのは、昔、言われてきた三ちゃん農業です。農業は、自分はそこでサラリーマンをするけど、自分は作業しないけれど、じいちゃん、ばあちゃんとお母さんが作業するという形で、三ちゃん農業をつないできたわけよ。ところが、現実はもうなくなっているわけよね。三ちゃん農業の動力がなくなってしまった。だから、自分も振り返ってみたときに、果たして今ここにおるのかということが一番の問題と思う。だから、やっぱり物事の組立ては、ただ理想的なものとか机上の空論を捉えても、世の中は動かないと思う。自らが手本を示して、地域に帰って、地域で一緒に汗をかいて、そして

次の人に引き継いでというようにバトンタッチしていけば、できると思う。もう一つあえて言うならば、僕はある企業を３社誘致したんですよ。３社とも全く同じことを言った。企業を地域で守ってきた人たちに「あなた方は、このたび企業を誘致されたけど、地元に住んでほしいと言う。しかし、「地元に住んでほしい」と言うだけではなしに、地元の皆さんが、この後を継ぐ職員、いわゆる従業員になってほしい」と言ったんですよ。その人は、現実問題、当時の山陽町で誘致した企業のオーナーさんですが、皆さんの前ではっきり僕が言ったことをつないでくれて、私たちは「そのとおりです」と。「１００年操業できる企業を（聴取不能）」とおっしゃいました。そのとおりだと思うんですね。「だったら、あなた方は、お父さん、お母さんがその企業に就職してもらう人がおられますか」って社長が言われたら、「私たちが継がせてもらいます」って言われました。僕はすばらしいと思った。それがやっぱり、同じことに時代が継承していかないと続かないんじゃないかと思う。一番は職業の問題にもつながってくると思う。例えば、もう一つ考えてみると、合併によって、地方公共団体あるいは公共的団体もほとんど縮小しているわけ。それまでは、そうはいっても山陽地区に住もうとか小野田地区に住もうとか言っていて、一部の人は宇部市や下関市に行ったけど、７割方は地元に残りました。地方公共団体の職員はそういう選択肢があるかどうか。例えば、農協はどうなのか。全部合併してしまった。働くところはないんよ。漁業だってそうだ。それは確かにそういう合併という現象が起こって、継続性がないといけないという問題があったにもかかわらず、漁業を衰退させた。いや自分たちは、もうできんのだと。農業も同じことよね。だから、私も非常に自己矛盾を感じるんだけど、では、自分が本当に何をできるのかと思ってね。だから、机上の空論を言ったってつながらないんじゃないかなと。やっぱり一番は、本当に住みたいという場所がどこにあるのか。住む場所があるところに、子供を育てたい、学校に行かせたい、仕事にも就いてほしいと。やっぱりそういう選択肢があって、自分の持ち家があって、その持ち家に一緒に住んでもらいたいというものがつながってくるわけよね。だから、私はそういった点を線に、

線を面にするような社会づくりをしていかないと、一面的にといってもこれは片付かないと思う。だから、いろいろなことを考えながら、点をつなぎながら、その点を線にして、線を面にして、面を地域にしていくというような構想を立てないと、現実は困難なんじゃないかなと思います。長々と申し上げましたが、これには実は答えがいっぱいあるわけ。だからそれをつないでいかないとそういうふうにならないと思うけどね。だから、なかなか難しい問題と思いますけど、どうにか次世代に物事をつないでいきたいなと。だから、その中にも実は祭りをまだ盛り込んでいるわけよ。祭りを引き継いでもらいたいという事業も僕たちは一生懸命しています。しかし、後継ぎをつくるためには、次に継ぎ手をつくらないと継いでもらえないんですよ。ただ、古式行事保存会といった単純な問題じゃなしに、そういうメンバーを集めないと、祭りはつながらない。祭りが商業につながっていると思います。いろいろ申し上げましたが、そういったことをしっかり考えていくべきじゃないかなと思います。

中岡英二副委員長　私は、若い人が都会に出るのは、価値観の違いだと思うんですよ。年を取ったときの価値観と若いときの価値観は違うと思います。年を取って山陽小野田市に帰ってくることは次世代の育成につながると思うし、お祭りとか中学校時代の思い出とかは、すごく大事だと思います。山陽小野田市も各地域でお祭りをやっていると思いますが、各地域によってその地域を知っている子供たち、例えば何とか校区の小学生がこの地域の祭りをたくさん知っているか、ここに駐在所があるのを知っているか。ここの地域のよさというのをもう一度幼いときから育成して、高校や大学を出るときには、都会の若い人の価値観というのは、いろいろ勉強したいとか職場が多いとか遊ぶとかは、諦めるんじゃないですけど、ある程度許容して、その代わり、年を取って都会には住みたくないというように、価値観が変わってくると思うんです。そうしたときに、ぜひとも山陽小野田市に帰ってきて住んでもらうというのと、山口東京理科大学の学生の地域愛というのは少し違うと思います。先ほど伊場委員も言われたように、山口東京理科大学の学生にこの地域に住んでもら

うというのは、市議会自体も動いて学生との関わりを持っていく、学校に行って学生さんたちにもお祭りに参加していただくと。この山陽小野田市のよさを全面的に出して、自然がいいです、環境がいいです、災害が少ないですという良いところを知ってもらって、郷土愛を育むというのが大事と思います。たしかに、給食費をただにするとか、子育て支援をしていくとかがありますが、よそもいっぱいやっています。それよりも、ここの強みを最大限に出して郷土愛を培っていくほうが、次世代への育成につながっていくんじゃないかなと思います。

山田伸幸委員　郷土愛というのは、住んでみて、よければ自然に出てくるものだと思います。こちら側が力を込めて言わなくても、そういった思いを持ってもらえるような施策を展開すれば非常にいいなと思います。先ほど千葉市の例が少し出されましたけれど、東京近郊で非常に注目されているのが流山市です。人口２０万人程度で、子育て支援が非常に充実していて、東京圏の一角として仕事は東京、子育ては流山市というように学校教育にも力を入れています。何とか公園というのがあるぐらいで、特別にこれといったものはないんですけど、子育て支援策で非常に注目されて、東京の若い人たちが移住してくるという感じになっているんですね。やはりそういった人たち、特に２０代から４０代の女性が、ここに住んでみたい、ここで人生の大事な時期を子育てに力を入れて過ごしていきたいという思いを持っていただけるということは、非常に大事なファクターになってくるんじゃないかなと思います。それだけじゃなくて、以前から持ち出している豊後高田市とか、私たちも視察に行きました国東市とかは、やはりそれなりに実績を上げていて、すばらしい施策を展開しているわけですよ。それをすれば集まるかというと、それだけじゃないと思うんですけど、何に力を入れているのかは私たちが学んでいくべき課題ではないだろうかと思います。何も施策を展開せずに「おいでください」というのは、ちょっと虫が良すぎるんじゃないかと思います。

中岡英二副委員長　今、山田委員のお話の中にあった「おいでください」というのは、よそから来てもらうという意味ですか。ここに住んでいる次世代の育成についての話をしていくので、確認です。

山田伸幸委員　みんな一緒だと思うんですよ。今いる人たちがこのまちに住んだまま次の世代への育成に力を入れていく。それだけでは減っていくんですよ。それとは別に、新しいいろいろな施策を展開することによる魅力創造で、そういった人たちの興味や関心を引けるようなことがないと、かなり難しいんではないかなと思うわけです。ここに住んでいれば、こんないいことがあるよというのがきちんと伝わらないと、そして住んでみて、やっぱりここはいいなと思ってもらえる、そして一番いいのは、生まれながら育って、もうこのまちから絶対離れんぞという生き方もありましょうし、１回外に出てきて、自分の生まれ育ったまちを見直していくということもあろうかと思います。それにしても、見直すときに、いいまちだったと言ってもらえるようなまちにしていかなくてはいけないなと思います。そういったことを含んでの発言だと思ってください。

大井淳一朗委員長　まず、どういうアプローチをするかを考えたときに、多分、今ここに住んでいる人に焦点を当てるのか、よそから来てもらう人に焦点を当てるかの違いだと思うんですよね。山田委員の言われることが別に間違っているわけではないですけれども、最初に仕分けるために、次世代の育成について、皆さんが言われていることは全てつながっているとは思うんです。ただ、論点を絞り込むためにどうしたらいいかと考えたときに、冒頭で申し上げましたように次世代育成をするための家庭環境、子育て環境をよくするというアプローチと、吉永委員が言われるようにもう少し若者層にも当てるべきかもしれませんが、子供たちの育成や郷土愛を育むといったように、そうした人たち自体を育成していくのかという面で、多分両方ともアプローチが違うと思うので、まずはそれを絞り込みたいと思っております。子育て支援が間違っているんじゃなくて、皆さんが言われたことは全て大事なことだという前提の上で、絞

り込んでいきたいと思います。

笹木慶之委員　今の現実を皆さんと一緒に考えてみたいと思うんだけど、例えば、小学校区ごとに考えてみたときに、人口が減っていないところもあるんですよ。その地域はなぜ増えたのか。それはそこに住みたいからだと考えたときに、職場がないと生活できないということになってくると、親子の問題につながってくるわけ。それで、もう一つ。今度はもう１回、また制度が変わってきたわけだけど、高校まで行こうとしたときに、中学校の段階で通学区の制度が変わってきた。高校はどこでも自由に行ってくださいよと。それまでは、実はある高校に行くためには、どこの学区、地域に行かなくてはならないということがあって、そこで閉塞されたわけ。ところがそれが解かれたら、今度は自由に動き出した。自分たちでも行っていいんだと。そして親も止められなくなったから、だから、ある地域は家が増えだした。皆さん、見ていると思うんですよ。厚狭地域だって一緒です。新幹線の駅ができました。新幹線で通学できるんじゃないか、通勤できるんじゃないかという問題がクリアできたから大丈夫だということで厚狭地域はどんどん増えています。片方では増えたんだけど、農業はどんどんすさんでいった。しかし、土地はみんな動いているわけですよ。この人たちは全部厚狭小学校に行きます。調べてみたら、少なくともこの２０年間ぐらいの間には、子供たちは、まず現象面は全くないというものが見えてきた。２０年間よ。小学生が少なくなるという現象が見えてきたが、むしろ増えるんじゃないかという要素が出てきた。これは小野田地域のある地域と一緒よね。何かその現象面を変えていかないと、その流れは変わらないじゃないかと思う。そこには、学校の問題、特に義務教育間の問題、それから、所帯主の仕事の問題、その次に出てくるのは自然環境の問題、つまり災害がないという問題、これらが選択肢となって、住みやすいまちというキャッチフレーズに、長い間をかけて継続してなっていくんじゃないかと思うんですよ。だから、それを無視して、ただの事実行為だけでは絵に描いた餅となると思う。それがさっき言ったように、一つのものにつながっていけるような

ものがないと、なかなか難しいのかなと。そこにもまた、実はとなり町の話は余りできませんが、その中で、出てきている人口減少問題が、明らかに選挙の中に出てきていたわけよね。それは、公共交通網の関係です。例えば美祢線がなくなるとか、人が動けなくなったら人が住めなくなるという現象があるんだよね。我々も同じ現象が小野田線にあるかもしれない。だから、そういったものをつぶさに評価しながら、本当の問題としてどうあるべきかを考えていかないと、政策としてなかなかつながっていかないんじゃないかなと思います。

中村議会事務局次長　笹木委員の発言を否定するわけじゃなくて、恐らくさっき大井委員長が少し交通整理をしかけたんじゃないかと思うんです。そこを詰めていかないと、また、いろいろなテーマで行ったり来たりしているような気がするのが一つあります。そこも委員長でしっかりと取り仕切っていただいていいんじゃないかなと思います。一旦整理しかけたのをまた笹木議員が少し広げた話をされていたような気がするので、そこはまず１点です。おっしゃったところもいずれ皆さんで議論する中で大事なテーマになってくる可能性がありますけど､長内先生の研修では、そこをきちんとデータでもってはっきりしたものを出していくべきじゃないかとおっしゃっていて、皆さんもそれを学んだと思うので、そこはまたその後で必要になってこようかなと思います。以上です。

大井淳一朗委員長　ですから、笹木委員の言われることは、広い意味では正しいんですけど、まずは、次世代の育成を図るときに、次世代育成のための家庭環境をどうするかというアプローチと、もう一つは次世代自体をどう育成していくかというアプローチのどちらを取るかということをしたいと思っております。それを踏まえて皆さんからお願いします。

山田伸幸委員　先ほど厚狭校区や高千帆校区のことが出ましたけれど、私は改めて調べ直して、以前の一般質問で言いましたが、環境がいいと思われる周辺部での人口の落ち込みが非常に大きいということが分かっていま

す。要するに、そのまちの魅力を発揮し切れていないし、若い人たちが、ここに住みたいという思いになっていないんではないかなということを感じざるを得ないんですね。そういったところに光を当てるのか、それとも市全体で次世代育成という観点だけでやっていくのか。その辺で的を絞っていかないといけないのではないかなと思います。

伊場勇委員　まずは子育て支援策に行くのか、郷土愛といった根本のところに行くのか。私は郷土愛のほうが大事かなと思っています。子育て支援策もすごく大事なんですけども、結構単発的なものもあるし、昔と比べるとメニューも物すごく多いと思うんですよ。私も子供がいるから「いっぱい手当をもらっていいね」みたいにいろいろ言われるんですけど、そうじゃない根本の郷土愛です。自分のふるさとの誇りってそれぞれあると思うんですけど、ない人のほうが多いんじゃないのかなと思うんです。私の誇りは、生まれ育った田舎と山陽オートが誇りだったんですよね。ほかにはないところだから。要は自慢できるじゃないですか。そういうところが子供たちにそれぞれあるのかなと思って。「あなたの誇りは何ですか」と聞かれたときに、僕も都会に出たのでそのように答えるようにしていたんですけど、今の山陽小野田市の誇りって子供たちはみんなどう思っているんだろうと思って。郷土愛の教育を結構詰めてやっておけば、何かそれが誇りになって、ずっと自分の中に残って、それが次世代の育成につながるし、今後のまちづくりにも意味をなしてくるのかなと思うので、それぞれのふるさとはここにあると思うんだけど、根本的な誇りをきちんと確立することが原点で必要なんじゃないかと思います。

山田伸幸委員　伊場委員の意見は、人口定住をさらに推し進めていくような施策を展開していこうということなんでしょうか。それとも、外にも目を向けて、そういった人も巻き込んでいこうという観点なんでしょうか。

伊場勇委員　すぐ人口増減の話じゃなくて、まずは生まれた子供たちです。だから、きちんとしっかり誇りを持って、しっかり育って、大人になって

もその誇りを継続してほしいということです。そうすると、良い効果があるんじゃないかということです。最近産まれた子だったら、それは多分、２０年後とか３０年後とかの話ですけど、次世代の育成を今しておかないと、３０年後４０年後の話にはならないよねということです。意味が分かりますか。だから、単発的でしようと思ったら、子育て支援でぼんと突っ込めばいっぱい集まりますし、子供を産むでしょう。それって単発的な話じゃないですか。結局散らばってしまうんですよね。根本的に、きちんとこのまちで育った子を戻して、ここで幸せな家庭を築きたいと思ってもらう。その核となるものは何か。このまちが本当に好きじゃないと、多分、お金だけじゃこのまちに残らないですよね。ほかにお金が出るところに移り住んでしまいますよね。もし何かあったときにということです。意味が分かりますか。その根本をきちんとしておきましょうって話です。

笹木慶之委員　まず早急にしなくてはいけないことは、人づくりだと思います。人がまちをつくるんですよ。人が地域をつくるんですよね。だから、そこにエネルギーをつぎ込んで、そして皆さん方でふるさとを守ってもらいたい。そこにつなげてもらいたい。だから人づくりだと思います。いろいろな教育を踏まえた中で、皆さんと一緒につくってもらいたいなというのが僕の願望です。自分が若いときに、わざわざ振り切ってそこに住んだことがあるわけよ。だから、余計に考える面がありますね。

大井淳一朗委員長　人づくりというキーワードが出ました。伊場委員は郷土愛の醸成ということを言われました。そういう視点も大事で、子育て支援はやらなくていいということじゃなくて、これはまた別のステージでもできると思いますので、ここは人づくりへのアプローチに近づけていっていいかなと思います。

山田伸幸委員　施策のことが出たんですけど、山陽小野田市はその取組が非常に遅れているという実感を皆さんがお持ちではないという気持ちを持た

ざるを得なかったんですけど、どうなんでしょうか。そういうことは、もう言うべきではないと考えておられるんですか。

大井淳一朗委員長　いやいや、それは違うと思います。それはそれぞれの議員活動あるいは議会活動の中でやっていけばいいと思います。ただ、私たちが政策提言をする中で、住みたい、住み続けたいまちにするためにどうすればいいかという中で、それをあるべき姿にして、その中の一つのテーマである次世代育成を話しているところです。山田委員が大学生のことを言われましたが、これは山口東京理科大学との連携の中で触れざるを得ないと思っております。大学で学んだ生徒たちが自分たちの住んでいた地元の県に帰ってしまう。それをこちらに定着させるためにどうしたらいいかというところが、山口東京理科大学との連携という項目の中で生かされてくると思っております。今回の政策提言で全ての分野を網羅できるとは当然思っていませんので、それはスタートとして、あくまでも、私たちが今回するのが全てではないことを前提にと思っています。ただ、とはいえ、全てを網羅できませんので、三つのテーマに絞ってやっていくと。今日は次世代育成ということで、人づくりとか郷土愛とかいったキーワードが出てきましたが、元に戻りますと、子育て支援、要は次世代育成のための子育て家庭の育成、支援というアプローチではなくて、次世代自体の郷土愛の醸成とか人づくりとかといったことを中心に焦点を当てていきたいと思いますが、よろしいですか。

山田伸幸委員　それでいいんですかね。聞きながら逆に少し不安になってきました。どの世代に焦点を絞っていくかというのは、非常に大事なんですよ。次世代というんだったら、その次世代の子供たちに絞るのか、親の世代に絞るのか、さらにその上の世代、中高年に絞るのか、いろいろあろうかと思うんですよね。先ほどから郷土愛というのは出るけど、正直――私自身がよそから来た人間で、もうこのまちに骨を埋めようという思いで取り組んでおりますが、なぜかというと、このまちの中でいろいろなものがあって、まだまだ不足しているところに自分自身の力を尽く

して、本当にこのまちをいいまちにしていきたいという思いからです。ターゲットを絞らずしてできるのかなと思いますが、どうですか。

大井淳一朗委員長　例えば、もし郷土愛とか人づくりとかとしたときに、今度はターゲットをどの世代に充てるかということも必要だと思っております。山田委員の言われるとおり、このまちにもともと生まれている人もいれば、たまたまふるさとは違うところだけど就職を機にこっちに来る人もいますので、そうしたことも、もちろんその人に郷土愛がないわけではないわけですから、そういう焦点の絞り方もそこは変わってくると思います。山田委員はもともとここには住んでいなかったというのはありますけど、こちらに来て骨を埋めると言っていたように、当然そのように後発的に郷土に対して愛着を持っていただく方も当然いらっしゃるし、その方はとてもありがたいと思っております。それは大前提です。皆さん、どうですか。ですから、人づくり、郷土愛の醸成といったところにアプローチしていきたいと思います。だから、この特別委員会全てに言えることですけども、皆さんそれぞれ思いがあるし、意見もあるんだけれども、一つにまとめていかないといけませんので、自分のものが１００％かなうものではないということは、私も含めて皆さんも認識ください。ただ、ここで消化できなかったものは、また次のサイクルもあるし、議員活動としても、議会活動としてもやっていただければいいと思います。それを踏まえて、今日お話をできたらと思います。

山田伸幸委員　私も議員として、山陽小野田市が一番やるべきことは、市の都合ではなくて市民が本当に求めていることかどうなのかという視点がなければ、そして、どういった姿勢を持つべきかというところをしっかりとやっていかないと、的外れになってしまう。そうならないようにしていかないといけないということを第一にして、本当に今、私たちがやろうとしていることが求められているかどうかとは、逐一チェックしていく。先ほどから人づくりとか郷土愛とかいろいろ出ておりますけれど、それは２次的な問題じゃないかなと思っているんです。というのは、本

当にいいまちだったら、そう言わずとも、このまちに住み続けて頑張っているわけですよね。その点を踏まえて、私たちは今の市政について、きちんと点検していくことも必要だし、どういった政策が山陽小野田市にとって今後の発展のために必要なのかというのは、しっかりと見ていかないと、何のためにこの政策提案特別委員会を形成したのか分からなくなってしまうんじゃないかなということを非常に危惧しています。

大井淳一朗委員長　山田委員が言われるとおり、当然、郷土愛を持ちましょうという政策提言するわけではありませんので、持つことができるようになるためにどうしたらいいかということの環境整備の中で、公共交通網は別のまたテーマでやりますけど、笹木委員が先ほど言われた一次産業が衰退しているところをどうしたらいいかというのがありますので、山田委員の「もっと持つべきだ」という視点は持たなければいけないと思っております。だから、郷土愛を持ちましょうというようなことを今から言うんじゃなくて、次世代育成という枠組みの中で、人づくり、郷土愛というキーワードが出てきましたんで、今からこれを基に環境整備をしていく政策を打っていくという形を取りたいと思っております。

笹木慶之委員　したがって、前提論を長々と言ったので、そういった面があったかもしれませんが、しかしそれはつないでいく問題だと思うんですよね。つなぐ問題の一番大事な課題は、人づくりだと思うんですね。人がつないでいくものです。だから、さっき言ったわけですよ。だけど、それを根本的な議題とするならば、人づくりをきちんとしながら政策を打つという、市長の総合計画の中にもある人づくりというテーマ、言葉そのものが入っていますよね。別段、藤田市長の機嫌を取るわけじゃないですが、私たちは本当に単純に考えたわけです。やっぱりこれなんだと。そこが結果的にはまちづくりのテーマとしてつながっていくんじゃないかと思ったので、それをいろいろな形で広げていって、政策として提言するほうがベターじゃないかなと思うんです。だから、切り口はそうだけど、そこに結んでいくんじゃないかなと思うんですよね。今日はその

ように考えていました。

伊場勇委員　郷土愛や人づくりについては社会教育の分野だと思うんです。郷土愛について、小中学校ではどういった方法で教育されているのか。また、山口東京理科大学についても、どのようにして山陽小野田市の郷土愛をやっているのか。大学には歴史の先生がいらっしゃいますよね。その方が地域の歴史について学んで、君たちはどう生きるのかという講義もされているようです。それは、もちろん郷土愛を育むものだと思います。小中学校でもいろいろ活動をされていると思うんですけども、何か平たく浅くみたいなイメージが少しあります。もちろん具体的な内容は僕らも知る必要があるかなと思うんですけれど、裏づけだったり、もしそこに足らないのであればこちらから提案したりするのも一つかもしれないなと思っています。

中岡英二副委員長　私も伊場委員と同じ考えなんですが、実態をつかむことが大事だと思うんですよね。現実として、高校を卒業して何人の方が山陽小野田市に残って、何人の方が出ていっているのか。まずは実態調査をする。私たちが思った以上に山陽小野田市に若者が残っているかもしれません。私たちの思い込みもあると思います。だから、実際に１８歳以上の方が何人外に出ているのか、数字を取りにくいかもしれませんけども、逆に何人の方がこちらに戻って帰ってきているかという実態調査をした上で、対象を小学校、中学校、高校にするのか、郷土愛を育むどういう施策をといったら難しいですけど、そういうことをみんなで考えていったらいいんじゃないかなと思います。まずは実態調査、データが絶対必要だと思います。

大井淳一朗委員長　これはよく言う自然減、社会減の構造でプラスとマイナスで、ざっと年代別に並べているのがあります。１８歳以上で結構な社会減が出ていてといったようなデータがありますので、そういうものを基に考えていくのも一つのやり方だと思います。一つの人口動態は言われ

るとおりあります。ここで、暫時休憩したいと思います。

午後２時２８分　休憩

午後２時３８分　再開

大井淳一朗委員長　それでは委員会を再開します。皆さんから意見を頂きました。それで、大きな枠としましては、次世代育成については地域、人づくり、それから、郷土愛の醸成、シビックプライドも含めて、そういった観点からアプローチしていく方向性が大方の意見だったと思います。それで、本市の方向性の中に、三つの創る中で「ひとを創る」という枠組みがあります。まずはそれを出して、その中で、当然のように十分なところと不十分なところがあると思いますので、次の政策提案特別委員会では、それを出して、その中でさらに絞り込んでから本市の現状という形で行きたいと思います。あわせて、ほかのテーマについて進められるところがあれば進めていきたいと思います。そのような形で進めていきたいと思いますが、よろしいですか。（「はい」と呼ぶ者あり）では、そのようにしたいと思います。それでは、付議事項２点目、その他ですが、よろしいですか。（「なし」と呼ぶ者あり）それでは、本日の政策提案特別委員会を閉じます。皆さんお疲れさまでした。

午後２時３９分　散会

令和６年（2024 年）５月１０日

政策提案特別委員長　大　井　淳一朗